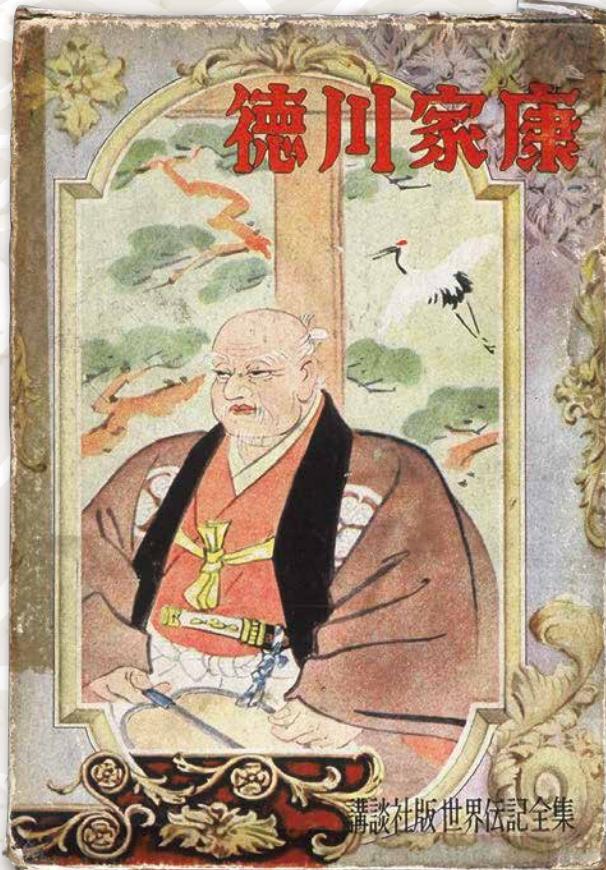


松本清張記念館

◆館報◆
2023.8
第72号

「足ることを知つて足る者は、つねに足る。」

というのは、人間の欲にはかぎりがない。その欲を追つていくと、つい身をすきる。しかし、これでじゅうぶんだという限界を知つてゐる者は、いつも不足を考えずに満足している、という意味である。



『徳川家康』『世界伝記全集 19』
1955年 大日本雄弁会講談社 書き下ろし 初版

書影の写真（小野成視撮影）

目次

- | | |
|-------------------|---|
| 松本清張研究会・第45回研究発表会 | 2 |
| 特別企画展「清張福岡紀行」 | 6 |
| ミニ企画展について | 7 |
| 友の会活動報告 | 7 |
| トピックス | 8 |

（学芸員 柳原暁子）

作品紹介

一五四二年、徳川家康は今の愛知県岡崎市の城で生まれた。時は戦国時代、父・松平広忠は小さな大名だったため、今川義元と織田信秀という強大な大名に挟まれ苦境を強いられた。權謀渾々く乱世の中、竹千代（家康の幼名）は三歳で母と別れ、六歳で敵の人質となり、八歳の時によやく帰郷したがすでに父は他界、またも今川の人質となるという不運な幼少期だった。今川に抑えられた松平家は、戦となれば先に出され、民も貧しかった。しかし、当主が立派になるまでと家来たちは耐え抜いた。いわゆる「三河武士」が質実の代名词となつた所以である。

清張は、家康が学問好きだったことを評価している。同時代に天下を取つた織田信長と豊臣秀吉に比べ、書物から処世・治世を学び、辛抱強く思慮深かつた家康は、徐々に有力な諸大名を味方に付けて天下を取つた。その知見は以降二六〇余年続く江戸幕府の組織作りにも發揮された。

本書は、清張が少年少女向けに書いた徳川家康の伝記。一九五五年に出版された『世界伝記全集 19』に始まり、半世紀以上にわたりのべ七回出版されてきた。大人を対象としたものが多い清張作品の中において、「徳川家康」は他の歴史小説と書きぶりが異なり、偉人としての家康像には若い人たちに向けたメッセージが込められている。

松本清張研究会・
第45回研究発表会

松本清張「砂の器」国際シンポジウム

令和5年6月24日(土)午後2時～6時

松本清張記念館 地階 企画展示室

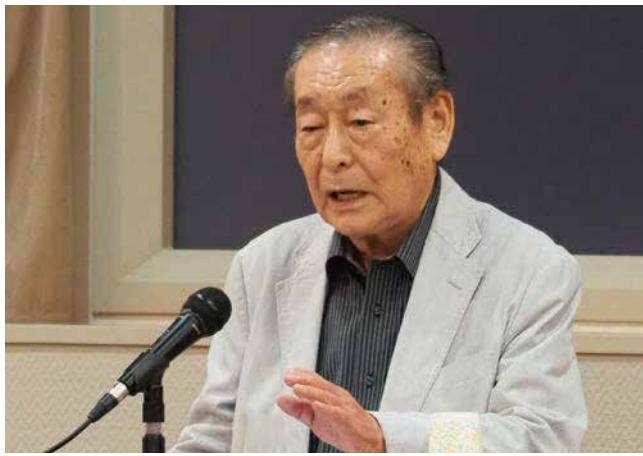
対面・オンライン併用(参加者…100名)

「文学史の中の清張」

講師

東京学芸大学名誉教授 山田 有策

山田 有策



最初に私の
文学史の考え方をお話しさ
ておきたいと
思います。一

必ず前の時代
の何かが作用
しており、そ
こには流れが
あり法則性が
ある。作品と
作品の間のつ
ながり、その
様々な線の総
合が文学史で
あるというこ
とです。

少し具体的な例を挙げます。清張さんより十年ぐらい年上の方で、海野十三という作家がいます。雑誌『新青年』にSF的探偵小説など沢山の作品を発表しました。その作品に「振動魔」というのがあります。お金持ちで奥さんも美しく、何不自由のない生活を送っている男が主人公です。しか

し、当時は死病の肺結核にかかっている。で、名医の手術を受けます。ある薬品で肺の周りをブロックして結核菌が入るのを阻害する、そんな手術を受けて回復する。そのうち、名医の若い奥さんと不倫の関係になる。奥さんは妊娠し子供を産むという。困り果てた主人公は庭に密室の実験室を作り、奥さんを入れてある音響を響かせる。その振動によって子宮の中の胎児を殺すわけです。女は去り、男は解放される。ところが皮肉なことに、その振動が手術でブロックした彼の肺の壁も壊してしまい、彼も死ななくてはいけなくなる。

「振動魔」という作品は、音波を使うのが新しい。読むと、どこかの何かとひつかかってくる。今日、国際シンポジウムで語られるはずの「砂の器」の中の、第2第3の殺人。超音波による殺人です。時代は超音波の時代なんです。原作では、主人公は新進気鋭の音楽家で、電子音樂のエキスパートです。超音波によるメスで、心臓が弱い若い俳優に心臓麻痺を起こさせ殺してしまう。頼まれて、友人の文芸評論家の愛人の子供も墮胎させ、結果的にその女の人も殺してしまった。つまり、海野十三の「振動魔」を支えたアイディアは、超音波による殺人という形で浮上した、あるいは再生したと考えることができる。一つの文学史の細い流れです。

もう一つ例を挙げてみたい。松本清張に「発作」という作品があります。昭和32年の作です。主人公はギャンブル好きで借金に追われている。病氣の奥さんに仕送りもせずに愛人と遊び回っている。だらしない、どうしようもない男です。ある日、目覚めた時から不快なことばかりが起る。会社では大きなミスをしてから叱責される。借金もできず、愛人からも冷たくされて、ぼろぼろになっていく。

最後に、深夜電車に乗ってつり革につかまって前を見る。すると、一人の男が眠りそうで、横に倒れそうになつてまた元に戻る。同じことが繰り返される。毎日繰り返す自分の怠

惰な日常のリズムのように見える。離れられない。眠りそうでまた元に戻る。そういう律動に魅入られているうちに、発作的に荒々しい感情に突き動かされて、相手の首を絞めるかたちで飛びかかる。日常生活の中の不条理な怒り、あるいは殺意かもしれない。そこで小説は終わり、結末は読者に任せられている。

これは非常に巧妙な作品です。この「発作」を読むと、前の時代のある作品が思い浮かびます。大正文学を代表する作家、志賀直哉の初期の作品「剃刀」です。床屋の若い主人が主人公です。痔性で神經質ですが、名人氣質の職人です。その彼が風邪を引く。忙しい季節なのに、手が震えるほどの高熱を出して寝てなくてはならない。でも、元々痔性な人だから、弟子の若い職人さん達のやることなすこと気に入らず、苛立ちが募っていく。とうとう起きて剃刀研ぎを始めるが、その剃刀は得意先からつき返されてしまう。誇りがズタズタになる。

そういう時に、男がやつてきて「髭をあたつてくれ」という。これから女郎屋にでも行こうかというような下衆ばつた男です。潔癖な主人公は生理的にこの手の男は大嫌いなんですが、皆が止めるのを押し切つて震える手で剃り始める。そのときに、ふつと傷つけてしまうわけです。浮き上がりつくる小さな血の塊を見ているうちに、突然荒々しい感情に突き動かされて、剃刀でその男の喉を切つてしまふ。血しぶきが飛び散る凄惨なシーンで作品は終わります。

これもまた、日常の中の不条理な怒りとか殺意とかを描いているわけです。大正期の志賀直哉の「剃刀」という作品は、時代をずっと流れてきて、松本清張という作家に結びついて「発作」という作品になつて浮かび上がってきた。これも一つの文学史の流れです。

志賀直哉は、実は「濁った頭」とか「范の犯罪」とかの、この手の犯罪小説をいっぱい書いています。では、なぜこう

いう作品を明治末から大正にかけての時代に書かなければいけなかつたのか。実は、谷崎潤一郎も初期に犯罪小説をたくさん書いていた。佐藤春夫もそうです。廣津和郎という作家は「神経病時代」という小説を書いて、時代を神経病の時代と捉えた。大正期は、明治の荒々しい革命と戦争の時代から比べると、かなり落ち着いた小市民的な社会です。しかし鎮まつても明治の荒々しさは恐らく底を流れていく。大正期の若い芸術家たちは皆、その荒々しさを感じていたに違いないなく、それが犯罪小説という形になつて浮かび上がつてしまふと考えられる。

大正期は、文化がかなり拡大していった時代です。映画が出て、谷崎潤一郎はそれに夢中になりました。大衆社会の前段階です。文化を誰でも享受できる時代です。特に文学の分野では完璧に口語体が成立します。明治文学の難しい文語体が洗練されて、口語体になつていく。芥川龍之介とか菊池寛の小説を読むと、非常にわかりやすく明快です。特に芥川龍之介は美的完成度が高い。

またこの時代、文学が拡大して、一種のエンターテイメント性、娯楽性も必要とされてくる。明治の終わり頃は自然主義文学の全盛期です。非常に渋くドラマティックじゃないから面白くない。その反動か、大正期は娯楽性を文学の中に取り込んでいく。こういう大衆文化の推進者は、多分、菊池寛です。文藝春秋社を作つて、文化を大衆的に広げていこうとした。広がつたその一つが探偵小説です。江戸川乱歩が出てきます。

明治という時代は倫理と論理の時代です。それが大正期になると、例えば谷崎潤一郎が出てきて、「刺青」という作品を書きます。刺青など明治の作家は書けません。若い女の肌に刺青を施すことを念願として生きている刺青師の物語です。刺青を入れる瞬間に女性の方が強くなる。初めて人間の「身体」という問題が出てきたのです。これを引きずついてのが、江戸川乱歩です。変装したり、変身したり、女性に変わったり、人体改造をしたり。あれも「身体」の重要性を言つてゐるわけです。時代が変わるときは、そういう革命的な変わりかたをするわけです。

この大正期と比較して、同じような変革の時代として考へられるのが、昭和30年代です。例えば、新聞雑誌について加え

て週刊誌が出てくる。ラジオや映画もこの時に最盛期を迎えた。そして、テレビが出てくる。文化の媒体が限りなく広がっていく。本格的な大衆社会が成立した。同じ文化を誰でも共有できる大衆文化の時代がきたわけです。ほとんど領域で口語体が成立し、誰でも読んで書けるようになつていくのもこの時代です。

その時代をリードしたのが松本清張です。大正期に菊池寛がやつた仕事をもつと巨大にしたのが清張さんです。だから、菊池寛から松本清張という流れは明らかに見てとれます。こういう形で文化あるいは文学史はつながつていくのであります。また、清張さんが出てくることによって、それまで截然と分かれていた「純文学」と「大衆文学」が重なり合つて、エンターテイメントが非常に高度になつてくる。クロスして境目がなくなつた。

そして、清張さんのちょっと後に司馬遼太郎が出てくる。二人は、相棒という関係であると同時に、補完的な存在と考えていい。司馬さんは全部、時代・歴史小説です。二人はラインではなくワンセットで捉えることができる。清張さんは明治の作家では森鷗外が好きでしたが、司馬さんは圧倒的に漱石派です。明と暗という点でも相互補完的です。清張さんは昭和史の歴史の暗黒面をえぐるのが好きな方。ところが、司馬さんは歴史の明るい面を見ていこうとした。二人で補完し合いながら、昭和30年代から40年代の巨大な文化を作りあげていったのです。

もう一つこの二人が共通してやつたことは、歴史と文学を重ね合わせその境目をなくして、新しいジャンルを作り上げていったことです。清張さんの『昭和史発掘』とか『日本の黒い霧』を読むと、小説を読むよりスリリングで面白い。「一二・二六事件」なんて特にそうで、あれは歴史を文学にしてしまった。司馬さんもそうで、「坂の上の雲」は確かに小説はあるが、小説らしくない。僕が好きな『街道をゆく』という作品も新しいジャンル。

ところが、清張さんと司馬さんというセットにいち早く気付いたのが、半藤一利さんです。『清張さんと司馬さん』という本で、二人の間には太いつながりがあり、重なり合つてゐると、私よりも先に言つてしまつた。見事な比較作家論であると同時に、文学史論です。半藤さん自身が優れた昭和史

の研究家でした。半藤さん自身が清張さんと司馬さんと、そして私（半藤）というラインで考えていたのではないかと思います。

研究発表

「高度経成長期の映し鏡 —「砂の器」の「方言」と「標準語」—」

日本大学教授

田中 ゆかり



「砂の器」は、松本清張の初めての全国一般紙である読売新聞夕刊での連載小説で、方言研究ではよく知られた類似する言語的特徴が離れた土地に分布するということを、ミステリーのミステリーディングのツールとして使つた作品として知られています。

田駅の殺人事件の関係者と思われる人たちが「ズーズー弁の黒い霧」で話をしていたという証言に凝縮されています。蒲田駅は東京にあり、東京は東日本方言域であるため、ズーズー弁と言えば東北弁という方言ステレオタイプに根差すミステリーディングから「砂の器」は始まります。しかし、東北方言と出伯方言には、共通点もありますが、異なる点もあります。このあたりを清張はどうに描いたのか作中の登場人物の台詞に付与された言語的な特徴を抽出し、それが現実の方言分布や方言的な特徴と合致しているのかどうか、簡単に確認をします。まず、被害者の三木謙一は「東北弁のような言葉」を話す登場人物として造形されています。その

言葉には「東京弁ではないアクセントがあつた」とか、「東北の方だと思った」濁音の多い訛りが耳につく」「ズーズー弁」と目撃者は警察に証言します。三木の実際の台詞にこの三つの特徴が反映されているかといえば、アクセントは活字では確認できない事象なのでおいておきますが、「ズーズー弁的特徴」は、三木の台詞から一例をあげると「こんな嬉しいことはない」のように反映されています。他方、「濁音の多い訛り」とは、単語の中の清音が濁音化する語中有声化現象を指すと思われますが、その現象が生ずべき箇所が同じ台詞にあります。その特徴は反映されていません。語中有声化の特徴をもつ方言であれば、「嬉しいことはない」のこと」は「ゴト」となりますが、表記は清音のままです。

三木に与えられた台詞に反映された言語的特徴に注意を払うと、三木の話している方言は東北方言ではなくじつは雲伯方言だとの種明しになっています。しかし、証言者には三木の言葉は「濁音の多い訛り」だと言わせている。これは、清張が意図的に仕組んだ東北方言へのミスリーディングであり、方言的知識が深い人物が三木の台詞を注意深く読めば、早くもここで「答え合わせ」ができる仕組みになっているとも言えます。

「砂の器」が執筆された1960年代初頭は、現代方言研究の基盤が形成され、その成果が広く公開された時期と重なります。「砂の器」は、執筆当時次々に公開された新しい方言研究の成果を吸収しながら書かれたということが強く想像されます。清張はとともに方言に関心を寄せるタイプの作家ではありますが、「砂の器」で方言由来のミスリーディングツールを取り入れた背景として、高度経済成長期が日本語社会における方言意識の高まつた時代であったということは見逃せません。「ことばに関する新聞記事データベース」（国立国語研究所）を用いて5年刻みに「方言」に関する記事数の推移をみると、「方言」に関する記事件数が飛躍的に増えたのが、1965年から69年で、高度経済成長期の末期と重なります。内容面では「方言自殺・方言殺人」にまつわる記事や投書が非常に多く、当時が「方言ステイグマの時代」であつたことも分かります。

一方、新聞連載小説の主要登場人物に方言が与えられはじめている現象がこの時期に生じます。このことは、「砂の器」をそういった高度経済成長期の方言意識を投影した「方

言新聞連載小説」の一つとして捉え直すことが可能だということを意味します。

「砂の器」は、作中の登場人物である和賀英良にとつて隠したい過去を知る三木謙にはステイグマとしての方言が、過去を書き換えた男である和賀にはステイグマを覆い隠す「疑似標準語」が与えられています。連載当時は、方言が自分の出生・経験と固く結びついた「恥ずかしく・隠したい」ステイグマの象徴であったことを巧みに使っています。「砂の器」は、多くの人には具体的にはよく知られていない方言である雲伯方言と、まだ広くは知られていない方言らびに東日本方言の方言ステレオタイプを用いた高度経済成長期の「陰（隠したい過去、ステイグマ）」を映した「方言新聞連載小説」と言えます。

主人公格に方言が与えられた同時期の新聞連載小説には、司馬遼太郎「竜馬がゆく」（1962～66年、産経新聞夕刊）や川端康成の「古都」（1961～62年、朝日新聞朝刊）があります。「竜馬がゆく」の「土佐弁」は、高度経済成長期の「光（故郷を背負う「青雲の志」）」を、「古都」の「京都弁」は失われてゆく「美しい日本」の象徴であるという指摘をして、締めくくりとします。



どう観るべきかは、當時の中国人にとつて大きな話題でした。当時の中国青年の間では、和賀英良の姿と自分たちの姿を重ねて観ていました。和賀という人物は単純な批判の対象ではなく、その人生から教訓をくむ者だったのです。「人生観討論」が交わされた時期に公開されことも追い風となり、映画『砂の器』は中国社会に浸透したのです。

当時、映画の翻訳者は映画『砂の器』のテーマを、「和賀英良への同情」「資本主義社会による青年の悲劇」と読みとっていました。そして、脚本家の橋本忍と山田洋次の和賀英良に対する同情を、忠実に翻訳する努力をしていました。それが、この映画の流布に大きな役割を果たしたと思います。

映画の公開中、『砂の器』の中国語シナリオ「日本電影原本」が作品テキストとして流通し読まれていたことが、今回の研究で分かりました。その「出版説明」は日本映画の当時の観方に大きな影響を与えていました。

次に、連環画というメディアをご紹介します。連環画とは一種の中国ふうの漫画の形です。連環画『砂の器』は映画の一シーンを印刷して、その下に中国語の解説文を付けています。当時、『砂の器』の連環画は二種類出版されています。一つは、天津人民美術出版社の『砂の器』で、1981年3月に出ています。27万6千冊出版されてすぐ売り切れました。もう一つは電影出版社によるもので、1981年4月です。こちらは78万冊出版しました。脚本は原作どおりで211場面です。それに対して、天津人民出版社の連環画は158カット（場面）、電影出版社バージョンは177カットで、編集者の意図で絵コンテのように編集されました。

これらの連環画は、同じ画面でも、実は「解説」が違うこ

と simultaneous. 同時代にいろんな「砂の器」評が出ました。『砂の器』を

とが分かりました。例えば、ラストシーンです。映画では最後に、字幕という形でハンセン病差別についての一種の訴えが出来ます。それに対して、連環画では、電影出版社版ではタイトル『砂の器』についての理解を表現しています。子供が海沿いで砂の器を作っているシーンで、和賀英良の一生も一時的に器になつたとしても、砂の器のよう風に吹かれ雨に打たれれば壊れてしまうのだ、と中国語で解説されています。天津人民美術出版社バージョンは最後にハンセン病の親子が流浪しているシーンの下に、「宿命」に支配された和賀英良やその「宿命」を生み出した環境を治療しなければならない」との解説があります。

映画『砂の器』のヒットの余波として、中国全土に清張ミニストリーの出版ラッシュが起きました。大量出版は翻訳の通俗化をもたらしました。代表的な『砂の器』の訳本は、1985年の曹修林による翻訳の『砂の器』と、孫明徳たちの翻訳と、もう一つは2000年代の趙德遠の翻訳です。比較して見ると、1980年代は原作に忠実な翻訳の仕方をしているのに対し、最近になると翻訳も、社会派推理小説の巨匠というイメージにそつて、大衆読者むけに「帰化」的な翻訳が流布しています。

原作の『砂の器』には、「宿命」というキーワードは見らないが、中国語訳では「宿命」が宣伝文句となっています。映画や連環画などのメディアの力で小説の翻訳までが変えられ、中国における「砂の器」のテーマは「宿命」という言葉に収斂されているのです。

「メディア・コンテンツの地平へ、北米における「砂の器」とその受容（試）論」

研究発表

米国・コロンビア大学助教授

角田 拓也



本題のストリーミングサービスの方に移りたいと思いま
す。2017年から『砂の器』がストリーミング可能になりました。英語タイトルは『Castle of Sand』（「砂の城」）です。英語圏における日本映画史において、野村芳太郎の『砂の器』がどのような示唆を与えてくれるかを、

「メディア・コンテンツの地平へ、北米における「砂の器」とその受容（試）論」

北米では、1989年にSoho Pressという出版社から『砂の器』の英訳本が出版されました。現在も購入は可能ですが、Soho Pressは1986年に創立されたサスペンス小説などの特定のジャンルに特化した商業出版社です。翻訳者は

ベース・キャリーという方で、清張以外にもジブリ作品関連書籍の翻訳や宮崎駿の通訳などもされています。タイトルは、『Inspector Imanishi Investigates』です。直訳すると「今西刑事が捜査する」となりますが、キャラクターとしての今西警部補が前景化されているわけです。

今回は『ニューヨークタイムズ』に出た書評を紹介します。ライターはハーバート・ミッドギヤングといい、作家としても活動していたジャーナリストです。書評のタイトルは「Tea Ceremonies, Haiku And of course, a Body」です。直訳しますと、「茶道、俳句、そしてもちろん死体」です。ユーモラスである一方で、茶道、俳句という言葉で日本を前面に出しています。清張はここで「日本で最も人気のある作家の一人」として取り上げられています。加えて「刑事もの」や「警察もの」といったジャンルへの言及です。「フレンシックノベル」「科学捜査もの」などといった表現も使われています。特筆すべきは、ジョルジュ・シムノン（ベギー）とニコラス・フリーリング（イギリス）といった、歐米の推理小説家の名前を比較軸として提示していることです。シムノンの場合にはInspector Maigret（メグレ刑事）というキャラクターを中心に据えたシリーズものが非常に有名です。フリーリングの場合にはアムステルダムが舞台で、ファン・デル・ファルクという警部補を主人公にした小説で知られています。キャラクターを売りにした有名な欧米の推理小説家を明示することと、（「Inspector Imanishi」（今西刑事））にフォーカスしながら清張の『砂の器』を評している、と分析することが出来ます。

本題のストリーミングサービスの方に移りたいと思いま
す。2017年から『砂の器』がストリーミング可能になりました。英語タイトルは『Castle of Sand』（「砂の城」）となります。黒澤明や大島渚は北米でも非常によく知られていますが、野村芳太郎はそうではなく、クライテリオン（マーサー）はここで野村監督を「ジャンル作家」と位置付けています。もう一点明記すべきは、ここで展開されている世代別の映画史観です。具体的には、黒澤明は撮影所黄金期にあり、大島渚は松竹スチーヴエルヴァーグの旗手であるという既存の世代対立に依拠しながら、野村芳太郎世代は、黄金期にとつては若すぎるが、大島のスチーヴエルヴァーグ世代ほど若くはなく、野村は「中間」に属する不遇な映画監督であるという構図が提示されています。

クライテリオンチャンネルのような特異なメディア環境で映画を視聴するユーチャーにとつて、野村芳太郎の『砂の器』がどのような示唆を与えてくれるかを、「メディア・コンテンツの地平へ、北米における「砂の器」とその受容（試）論」

ンル」というキーワードを導入して考えていきます。

クライテリオンはニューヨークを拠点に1984年に設立され、DVDやBlu-rayなどのソフト販売や、販売のためのライセンシング、デジタルリマスタリングなどに従事しています。特徴的なのは、ハリウッド主導のエンタメ作品よりも、ワールドシネマ（世界映画）の名作選に主軸を置いています。大学の授業でも100%クライテリオンよりリースされたソフトは重宝されています。

2018年から映画専門の定額制動画配信サービス、クライテリオンチャンネルが開設されました。『砂の器』がこの独自のレーベルからストリーミング配信され、現在も視聴できることは特筆すべきことです。現在、野村芳太郎作品は5作品が視聴できます。『鬼畜』、『砂の器』と『影の車』、それから有名な『ゼロの焦点』と『張込み』です。

クライテリオンの公式サイトにベンジャミン・マーサーという映画評論家が、野村芳太郎監督について寄稿しています。クライテリオンの公式サイトに「The Crime Thrillers of Studio Maverick Yoshitaro Nomura」という表題で、直訳すると「撮影所の異端児、野村芳太郎の犯罪スリラー」となります。黒澤明や大島渚は北米でも非常によく知られていますが、野村芳太郎はそうではなく、クライテリオン（マーサー）はここで野村監督を「ジャンル作家」と位置付けています。もう一点明記すべきは、ここで展開されている世代別の映画史観です。具体的には、黒澤明は撮影所黄金期にあり、大島渚は松竹スチーヴエルヴァーグの旗手であると



令和5年 9月30日(土) - 12月17日(日)

会場 | 松本清張記念館 企画展示室

主催 | 北九州市立 松本清張記念館

[開館時間] 午前9時30分～午後6時 (入館は午後5時30分まで)

[入場料: 常設展示観覧料に含む] 一般600円、高校生360円、団体(30人以上) 割引あり

小・中学生は無料 令和5年度福岡県主催「子ども美術館・博物館無料鑑賞事業」の対象

[休館日] 毎週月曜日 (月曜日が休日の場合は翌日)・館内整理日 (10月26日、11月30日)

松本清張は自らの小説作法について、「たとえ筋は空想であっても、小説には現実がなければならない」(「私の小説作法」)と述べました。小説のディテールを書くために、人に会ったり、土地を訪れたり、なるべく取材する、と言います。

小説のリアリティを大切にした清張にとって、およそ40年の前半生を過ごし、土地勘のある福岡県は小説の舞台の宝庫でした。芥川賞を受賞した「或る『小倉日記』伝」から晩年の「両像・森鷗

外」まで、多くの作品で福岡県の印象的な風景を記しています。

本展では、福岡県が登場する清張作品を文章でたどり、作品の背景やそれらの舞台が現在どのような変化を遂げているかを紹介します。

今年、北九州市立松本清張記念館は、開館から25周年を迎えました。あらためて、松本清張文学の足元を探る企画展をめざします。

松本清張が君たちに伝えたかった徳川家康

ミニ企画展

開催中



- (1) 松本清張による伝記『徳川家康』
1955年に出版された『徳川家康』から、現在までの本を展示します。
- (2) 学問が好き！家康と本
清張は家康が学問好きだったことに注目し、出版も功績の一つとして紹介しています。
- (3) 少年少女に向けた清張作品
清張作品のなかで少年少女向けに書かれた本を展示します。
- (4) 君たちに伝えたかった家康のこと
伝記『徳川家康』を通して、清張が読者に伝えたかったことは何か、清張の言葉を拾い上げます。

展示構成



(1) 松本清張による伝記『徳川家康』

1955年に出版された

『徳川家康』から、現在までの本を展示します。

福岡県子ども美術館・博物館
無料鑑賞事業により

小・中学生
無料です！



開催期間..令和5年7月20日(木)～11月5日(日)
会場..松本清張記念館 2階オーブンスペース
入場料..常設観覧料に含む
(一般600円、高校生360円)

清張が少年少女向けに書いた家康の伝記を紹介し、その他の清張作品で描いた家康像との比較などを展示しています。
西南女子学院大学人文学部観光文化学科の学生有志が参加したコーナーでは、作品の一部を抜き出し「メッセージカード」として制作しました。カードは一人一枚まで持ち帰ることができます。



友の会 活動報告

清張サロン 第3回清張サロン

- 日 時：令和5年7月22日(土) 14時～15時30分 参加者21名
- 講 師：加島 巧氏(松本清張記念館友の会会長)
- テーマ：『砂の器』が書かれた頃、そしてその後
- 会 場：松本清張記念館 企画展示室

令和4年度3回目の清張サロンは、加島巧会長を講師に「『砂の器』が書かれた頃、そしてその後」と題して、お話しいただきました。



『砂の器』が描かれた当時のベストセラーであった他作家の本や話題だった映画、できごとなど、その時代背景と比較しながら、独自の視点で『砂の器』を解説いただきました。

皆さん時間が経つもの忘れ、聞き入っておられる様子でした。参加者からは「作品の時代背景を深く知ることができた。」「もう一度、読み直したいと思った。」「緻密な素晴らしい資料と詳しい解説がとても良かった。」など、大変ご好評をいただきました。

令和5年度(R5.8.1～R6.7.31)の友の会事業内容

- 清張サロン(年3回程度)
清張作品への理解をより深めていただくための講演会を開催
- 朗読劇(令和5年10月)
劇団「前進座」による朗読劇『砂の器』の上演
- 文学散歩(秋・春)
清張さんゆかりの地などを訪ねる旅行
- 生誕祭(令和5年12月)
清張さんの誕生日を祝うために毎年開催
- 友の会だよりの発行
(年2回程度)
活動報告や講演会のご案内等を会員様にお届け

友の会 会員更新と新規会員募集のお知らせ

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。

年会費は3,000円です。
皆様のご入会をお待ちしております。

友の会入会のお申込は、
TEL.093-582-2761
松本清張記念館友の会事務局まで



第25回

松本清張研究奨励事業 奨励金贈呈式

8月6日(日)にJ:COM北九州芸術劇場小劇場において、武内北九州市長をはじめ、市民文化スポーツ局長、審査員の方々にご登壇いただき、奨励金の贈呈式を行いました。いずれの企画もユニークで斬新な活動・研究であり、成果が期待されます。



武内北九州市長

入選者

『松本清張における服装の変容と無意識の構造 —ジャック・ラカンの精神分析を手掛かりに—』

川里 卓 (フランス国立東洋言語文化大学日本語学部専任講師)

『松本清張文学研究—「法」の問題を中心に』

孫 平 (九州大学比較社会文化研究院)



•編集後記•

毎年、8月に開館記念講演会を開催しています。今年は8月6日に作家の佐藤究氏をお迎えし、「小説の価値を世界の黒い霧」をテーマに講演をしていただきました。講演会後半は、サプライズゲストのフリージャーナリスト・丸山ゴンザレスさんと対談をしていただき、普段なかなか聞けないお話をしていただきました。内容は次回の館報でお届けします。

また、9月30日から「清張福岡紀行」展を開催します。どうぞ、記念館に足をお運びいただき、松本清張の文学の足元を探る展示をお楽しみください。(T.O.)



第26回

松本清張研究 奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

- 内容 入選者(団体)に100万円を上限とする研究奨励金を支給します。

- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(全て様式は自由。ただし日本語)を令和6年3月31日までに応募してください。



※詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問い合わせください。

▶ 講演会に行ってきました ▶

日付	主催者・会場等
5/19	藤ノ木市民センター
6/30	福岡アジア美術館
7/7	平野市民センター
7/18	北九州銀行協会
7/19	北州市民力レッジ 朽網市民センター



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761 FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>

制作 株式会社ハーティブレーン



- ◆ 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- ◆ 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- ◆ 観覧料 一般／600円(480円)、中高生／360円(280円)、小学生／240円(190円) ※()は30人以上の団体
- ◆ アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速 大手町ランプより5分